

卒業の準備 その5

「人間万事塞翁が馬」という故事成語がある。
世の中において、一時の幸・不幸は、それを原因として、すぐに逆の立場に変わりうるのものであって、軽率に一喜一憂すべきではないということ。

由来

劉安『淮南子・人間訓』の以下の文より。

(白文)

近塞上之人有善術者、馬無故亡而入胡。人皆弔之。其父曰「此何遽不為福乎」居數月、其馬將胡駿馬而歸。人皆賀之。其父曰「此何遽不能為禍乎」家富良馬、其子好騎、墮而折其髀。人皆吊之。其父曰「此何遽不為福乎」居一年、胡人大入塞、丁壯者引弦而戰、近塞之人、死者十九、此獨以跛之故、父子相保。故福之為禍、禍之為福、化不可極、深不可測也。

(書き下し文)

塞上に近きの人に、術を善(よ)くする者有り。馬故無くして亡(に)げて胡に入る。人皆之を弔(ちょう)す。其の父(ふ)曰はく、「此れ何遽(なん)ぞ福と為(な)らざらんや」と。居ること数月、其の馬胡の駿馬を將(ひき)りて歸る。人皆之を賀す。其の父曰はく、「此れ何遽ぞ禍と為る能(あた)はざらんや」と。家良馬に富む。其の子騎を好み、墮ちて其の髀を折る。人皆之を弔す。其の父曰く、「此れ何遽ぞ福と為らざらんや」と。居ること一年、胡人大いに塞に入る。丁壯なる者、弦を引きて戦ひ、塞に近きの人、死する者十に九なり。此れ独り跛の故を以つて、父子相保てり。

故に福の禍と為り、禍の福と為る、化極むべからず、深測るべからざるなり。

(抄訳)

国境の砦の近くに馬の調教に長ける老人(塞翁)がいた、飼っている馬が胡人(国境外の異民族)の土地に逃げ、近所の人々は同情したが、塞翁は「どうしてこれが良いことにならないだろうか」と言った。数ヶ月してその馬が、胡人の駿馬を連れて帰ってきた。近所の人々は祝福したが、塞翁は「どうしてこれが不運にならないだろうか」と言った。息子はその馬に乗り足の骨を折る大怪我をした。近所の人々は同情したが、塞翁は「どうしてこれが良いことにならないだろうか」と言った。一年して胡人が国境を越えて攻め入ってきた。国境の働き盛りのものは戦争に駆り出され、十人のうち9人の者が戦死した。塞翁の子は戦争に駆り出されず命を永らえた。

曰く、終わってみなければすべてわからない。一喜一憂せず、まっすぐに進んでいくがよい。